

気づかいルーシー

原作：松尾スズキ
脚本・演出：ノゾエ征爾

パワーアップした キャストが再結集して、 再演決定!

松尾スズキ原作の絵本から生まれた
舞台『気づかいルーシー』が、
全キャスト続投で再演される。
脚本・演出で、今回は出演もするノゾエ征爾と、
出演者の小野寺修二に意気込みを聞いた。

—— 一昨年の初演が、幅広い年齢層それぞれに大好評で、すぐに再演が決まったと聞いています。

ノゾエ 再演にはいろんなケースがあると思います。例えば、同じクオリティのものを同じように(観客に)提供することが大事な作品ですか。でも『ルーシー』はそうではない。まず、キャストの皆さんがこの2年間に大活躍されてさらに力をつけたので、技術的な点がまったく変わっているはず。僕も含め全員が「あの時のままでいいよ」とは考えていないでしょうし、作品自体が進化を求めている気がします。

小野寺 その通りですね。初演は大変だったけどとても楽しかった。その時と比較しながら進むのか、新しいことにワクワクできるのかは、稽古場に立ってみないとわからない緊張感があります。でも年齢的には、演じるおじいちゃんに2年分、近づきました(笑)。若い役の再演だと、かつての自分を取り戻さないといけないんですが、老いがフィットしていく役というのはなかなかない。おもしろい経験になりそうです。

—— 2年経った今だからこそ気づく反省点や良かった点があるのでは、と思いますか。

ノゾエ 基本的に、時間が経つほどマイナスのことばかり気になる人間なんです(笑)、『ルーシー』を振り返ると、自分の創作の姿勢そのものに関わる作品だったと感じます。僕は戯曲を書くのも演出を決めるのも遅いんですけど、その理由は、たぶん稽古場でいい偶然を探したいから。つまり、みんなで探検をしたい。『ルーシー』はそれができた現場でした。舞台美術も全く別の



案で仮組みまでしてもらったのに、どうしても違和感があって悩んでいたんですね。それをキャストの皆さんが「演出家、何やってんだよ」じゃなくて、一緒に彷徨ってくれて、巨大なジェンガのようなセットが生まれました。

—— その点は、フィジカルシアターのパフォーマーであり演出家でもある小野寺さんがキャストの一員であることが大きかったのでは？

ノゾエ はい。小野寺さんという尊敬するクリエイターの視点があるのに加えて、惜しみなくアイデアも出してくださって、本当に助けられました。

小野寺 偶然を待つ状態というのは僕にとってもすごく大事。むしろ、ノゾエさんとはそこが共有できるのがいいんです。

—— 小野寺さんはオープニングのシーンから登場する役で、この舞台の世界観を最初に提示する役割を担っていたと思いますが、プレッシャーは？

小野寺 全然なかったです。僕は役者としては経験が少ないですし、ノゾエさんを全面的に信頼しているので。アイデアは出しますし、自分がやることは一所懸命やりますけど、誰よりもまずノゾエさんに「いい」と思ってもらいたい一心でした(笑)。

—— 今回、ノゾエさんも出演されるそうですね。その理由は？

ノゾエ 個人的な欲求だと思います、俳優としての(笑)。今回、ありがたいことにツアー先が結構あるんですが、全部一緒に回れることがわかって、だったら、観ているだけなのも寂しいなど(笑)。真面目な話、地方によっては会場がかなり大きいところもあり、そういう時に空間を埋める便利な要員ですね。何かの役を演じるかもしれないし、音楽担当の人たちと絡むかもしれない。稽古をしながら、何ができるかを考えたいと思っています。

小野寺 僕はノゾエさんと共演できるのはうれしいので、大歓迎ですよ。

ノゾエ だからやっぱり、再演と言えども、稽古も本番もバタバタになるんじゃないかと予想しています。でもそれは、新しい何かを発見するための重要なバタバタなので、キャストの皆さんにはまた付き合ってほしいし、お客さんはぜひ楽しみにしてほしいです。

絵本そっくりのキャストや予想外の展開に、原作者の松尾スズキ氏も大満足したという本作。初演を観られなかった人はその楽しさを、観た人はパワーアップをぜひ期待してほしい。

取材・文：徳永京子
舞台写真：阿部章仁

7月21日(金)～30日(日)シアターイースト 詳細はP10へ
原作：松尾スズキ(千倉書房「気づかいルーシー」) 脚本・演出：ノゾエ征爾
出演：岸井ゆきの 栗原類/川上友里 山口航太 ノゾエ征爾/
山中崇 小野寺修二
演奏：田中馨 森ゆに

マルタン・ズィメルマン HALLO

たとえ世界が ひしゃげて 「ハロー」と 呼びかけるかぎり、 孤独ではないのだ。

世界中の舞台芸術の最先端で注目されているコンテンポラリー・サーカス。優れた美術と卓抜した身体性、アーティスティックな面とエンタテインメントの面が、高い次元で融合しており、家族全員で楽しめる作品も多い。楽しく、そして深い芸術的な満足感も味わえるのだ。

このジャンルで、世界でも高い評価を受けているのがスイスのズィメルマン エド・ペロである。これまで東京芸術劇場にも、彼らがモロッコのパワー・アクロバット・カンパニーに演出した『シュフ・ウシュフ』(2013)という作品や、4つの部屋がグルグルと回転する彼ら自身の作品『ハンスはハイリ』(2015)で来日している。じつに楽しく摩訶不思議な舞台を見せてくれたことを覚えている人もいだろう。

中心メンバーはカンパニー名にもあるデミトリ・ド・ペロとマルタン・ズィメルマンの2人。そのズィメルマンが、初のソロ作品を作っている、という情報はすぐに世界を駆け巡った。そして彼らの新境地として好評のうちに公演を重ねてきたこの作品が、ついに日本でも上演されるのである!

いったい、どんな舞台で、何が魅力なのだろう。

なんとといってもズィメルマンの身体が、まずもって面白いのである。顔が大きく、身体の割に手足が細く、ひよろ長い。鳥人間のような特異なフォルムで、ただ歩くだけでも目が離せない。だが不器用そうに見える身体が、不意に俊敏に動く。あるいは立っているだけで、得も言われぬ哀愁を帯びる。何をしても観客の目を集めずにはられない、天性のパフォーマーなのだ。



冒頭、ズィメルマンがマンガのように靴をキュッキュッと鳴らしながら歩いてくだけでも笑える。そして舞台上には、人ひとり入れるくらいの箱がある。実は彼らのカンパニー作品でも、箱や枠は重要なアイテムとして使われる。箱の中は狭いが、それゆえに安心できる場所でもある。あかりも灯り、くつろぐこともできる。ではもしも、もっと大きな箱を手にしたら? もっと安心して、もっと幸せになれるだろうか?

舞台上には箱、というか部屋がある。はるかにオシャレで居心地が良い。しかしよく見るとそれは、上下左右の壁があるだけの、「枠のようなもの」に過ぎない。ゆっくりとひしゃげていき、ペしゃんに畳まれてしまう。「大きく立派に見えた新しい居場所」はなくなり、暗い空間にたたずむズィメルマン。すると「枠」は再び動き出し、まるで呼吸するかのように、「部屋になってはひしゃげる」を繰り返す。世界は呼吸し、伸縮するのだ。

ズィメルマン エド・ペロのスタイルのひとつに、「安定しているはずの物が大きく揺らぐ」というものがある。先述した『ハンスはハイリ』の「回転する部屋」以外にも、『öper/öpis』では、広い舞台の床全体がグラグラと揺れたりするのだ。

本作でも、時に変容する箱/世界に押しつぶされそうになる。閉じていく箱/世界は、とてもひとりで支えきれものではない。しかし安定していると思っていた日常や生活が変容していくとき、人は必死にバランスを取って踏みとどまろうとする。世界と自分を繋ぎとめようとする試み、それ自身が、ずでにしてダンスなのである。

そしてズィメルマンはタイトルでもある「ハロー」と呼びかける。これは相手がいれば「こんにちは」という意味だが、独りで叫ぶとき、それは「誰かいないか!?!」という呼びかけになる。

応える声はないかもしれない。しかし誰かを探し続ける限り、人は孤独ではない。いまはまだ見えないだけなのだ……

シンプルに見えて幾重にも変化する舞台芸術。孤独だが愛さずにはられないキャラクター。見たことのない不思議な光景が次々に展開し、最後には少し淋しくも温かい余韻が残る。そしてあなたも「ハロー」と語りかけたくなるに違いない。目の前の誰かに対して、あるいはまだ見ぬ誰かに対して。

文：乗越たかお(作家・ヤサくれ舞踊評論家)

7月29日(土)17:00開演・30日(日)14:00開演 詳細はP10へ
プレイハウス
コンセプト・演出・デザイン・振付・出演：マルタン・ズィメルマン

リチャード三世

演出:シルヴィウ・プルカレーテ

オセロー

演出:イヴォ・ヴァン・ホーヴェ

海外の名演出家たちが、 人の感情の怖さに迫る

ルーマニアのプルカレーテとオランダの
ヴァン・ホーヴェ*。両者の演出スタイルは違うが、
「古典を現代の観客が共感できる舞台に
仕立てる名手」である点は共通だ

今秋、東京芸術劇場ではシェイクスピア劇の中でも人気の高い二作を、それぞれ世界で注目される巨匠の演出で見られる。欲望をたぎらす英国王リチャード三世と、嫉妬に悩むヴェニスの将軍オセロー。並はずれた能力に恵まれた主人公たちが破滅していく戯曲が、四百年以上にわたって各地で上演される理由は、双方とも決して特殊な人物の話ではないからだ。他人を支配したいという野心、自分だけを愛してほしいという切望……誰もが抱きそうな感情が巻き起こす嵐に、鑑賞者は胸底の思いを省みる。

男性俳優が王妃役も演じる『リチャード三世』

まず、10月にはシルヴィウ・プルカレーテが、日本人俳優を初めて演出する『リチャード三世』(木下順二訳)。非道な策略で権力を奪う王を演じるのは佐々木蔵之介。座組はオールメール・キャストに近い。戯曲が書かれた当時の英国では、役者は男性のみだった。が、本作の配役は、プルカレーテがワークショップで出会った俳優を選んだ結果だ。

国立ラドゥ・スタンカ劇場によるプルカレーテ演出ヴェデキント作『ルル』、ソポクレス作『オイディプス』などの来日舞台では、身体性の強い俳優が躍動

10月「リチャード三世」プレイハウス

作:ウィリアム・シェイクスピア 演出:上演台本:シルヴィウ・プルカレーテ

翻訳:木下順二 演出補:谷賢一

出演:佐々木蔵之介/手塚とおる 今井朋彦 植本純米(植本潤改メ)/長谷川朝晴 山中崇/

山口馬木也 河内大和 土屋佑老 浜田学 櫻井章喜/八十田勇一 阿南健治 有園芳記 壤晴彦/渡辺美佐子

チケット発売:7月15日 詳細はHPへ

朗読「東京」第5回

8月4日(金)~6日(日) シアターウエスト

詳細はHPへ



第4回公演より/左から 大鷹明良、陰山泰、内田亜希子
撮影:引地信彦

演出:長部聡介 朗読作品:◆江戸川乱歩 著「目羅博士の不思議な犯罪」 ◆内田百閒 著「東京日記」 ◆黒井千次 著「たまらん坂」

出演:手塚とおる/今井朋彦/高田聖子/志賀廣太郎 ほか

チケット発売:7月1日



し、エロスがあふれた。今回、ユーモアと残酷さを併せ持つ王に扮する佐々木はじめ、日本の俳優がどんな魅力を開花させるか、期待が高まる。

白人俳優がタイトルロールを担う『オセロー』来日公演

11月には米国のトニー賞や英国のオリヴィエ賞に輝き、映画スターを起用した舞台も成功させたイヴォ・ヴァン・ホーヴェが、トネル・グループ・アムステルダムを率いて来日。「オセロー」の登場人物は現代的な衣装で、スピーディーに奥深いドラマを演じる。

ムーア人の将軍オセローが、彼を憎む部下イアーゴにだまされ、妻デズデーモナの不貞を疑う。この悲劇はオセローが黒人、つまり「白人の共同体で異質な存在」であることが一因とされやすい。だが、本作のオセロー役は白人俳優が担い、新鮮な効果をもたらす。高潔なオセローが嫉妬に苛まれ、かけがえない宝だった妻を殺す過程から、人間の強さと脆さが浮上。観客は理知ではコントロールできない、愛の深淵を垣間見るだろう。

*ヴァン・ホーヴェはオランダの劇団と活動する拠点をアムステルダムに置くが、出身はベルギー。

文:桂真菜(舞踊・演劇評論家)

11月「オセロー」プレイハウス

作:ウィリアム・シェイクスピア 演出:イヴォ・ヴァン・ホーヴェ

出演:トネル・グループ・アムステルダム

チケット発売:7月15日 詳細はHPへ

東京を読み、東京を語る。人気企画の第五弾

2014年にスタートした“東京”をテーマにしたリーディング企画、朗読「東京」。

短編、戯曲、エッセイなど古今の名作に描かれた“東京”を俳優が朗読し、読後のトークで自分の“東京”をそれぞれが語る、二部構成でお送りする東京芸術劇場の連続企画。

第5回となる今回は、フジテレビのドラマプロデューサーとして「離婚弁護士」「医龍」など数々の人気ドラマや、近年では舞台演出も手掛ける長部聡介を演出に迎える。池袋とも馴染みの深い作家江戸川乱歩の「目羅博士の不思議な犯罪」をはじめ、内田百閒「東京日記」、黒井千次「たまらん坂」の三作品を朗読劇として上演する。池袋から発信する様々な「東京」の表情を是非劇場で。

チケット発売:7月1日

大人計画/日本総合悲劇協会vol.6「業音」

8月10日(木)~9月3日(日) シアターイースト

詳細はP12へ



松尾スズキ、衝撃の問題作。15年ぶりの再演

「大人計画」主宰の松尾スズキが作・演出を務める日本総合悲劇協会シリーズ。その第三作として2002年に上演された『業音』が15年の時を経て再演。演歌歌手として再起を狙う元アイドルを主人公に、不幸が不幸を呼び、負の連鎖が続く物語の中で、登場人物それぞれが背負う「業」の闇が描かれる。今回はパリで開催されるフェスティバル・ドートンヌへの参加も予定。松尾自身が初演を「失恋のようだった」と語る作品が新たなキャストで蘇る。

作・演出:松尾スズキ 出演:松尾スズキ、平岩紙、池津祥子、伊勢志摩、穴戸美和公、宮崎吐夢、皆川猿時、村杉蟬之介、康本雅子+エリザベス・マリー (ダブルキャスト)

芸劇dance 勅使川原三郎「月に吠える」

8月24日(木)~27日(日) プレイハウス

詳細はP12へ



勅使川原三郎

©Akimoto Aida

勅使川原三郎新作ダンス公演は、萩原朔太郎の詩集「月に吠える」をモチーフにした作品

昨年大好評を博した山下洋輔との共演「up」に続く新作。朔太郎の「月に吠える」の序文「月に吠える犬は、自分の影に怪しみ恐れて吠えるのである」に勅使川原は注目。その詩が持つ非日常感/日常感、日本的なものや異文化的なもの、怖れと美意識といった、相反するものの共存に触発された。ダンスで感じる詩的世界を表現するという。KARASメンバーに加え、勅使川原のダンス・メソッドを経験したダンサー、エヴィアン国際音楽祭で共演したマリア・キアラ・メツァトリ、イエテポリ・オペラ・ダンスカンパニーのパスカル・マーティが出演。鮮やかさ、きらめき、清らかさといった新たな陶酔の世界へと導いてくれることだろう。

文:森菜穂美(ライター)

振付・美術・照明・衣装・選曲・出演:勅使川原三郎

出演:佐東利穂子/鵜川枝里/マリア・キアラ・メツァトリ/パスカル・マーティ(イエテポリ・オペラ・ダンスカンパニー)

芸劇dance タバマ企画「コンダクター」/廣田あつ子×加藤訓子×広田稔「BACH」

9月8日(金)~10日(日)/22日(金)~24日(日) シアターイースト

詳細はP13、14へ



タバマ企画

加藤訓子

©m.oms

芸劇で楽しむ、刺激的な2作

若手ダンサーやダンスカンパニー、また他ジャンルとのコラボレーションによるチャレンジングな作品などを紹介する芸劇dance若手提携シリーズ。

今年は、田畑真希が主催するタバマ企画がカンパニー創設10周年を迎えて挑む新作と、意欲的な活動を続けるパーカッションist加藤訓子とダンサー廣田あつ子、そして洋画家・広田稔の3人のアーティストのコラボレーションによる「BACH」の2作品を上演します。

タバマ企画「コンダクター」/振付・演出:田畑真希

「BACH」/出演:廣田あつ子(ダンス)/加藤訓子(音楽)/広田稔(ライブ・ペインティング)

芸劇eyes 贅沢貧乏「フィクション・シティ」

9月28日(木)~10月1日(日) シアターイースト

詳細はP14へ



「デンデン」(2016年)

Photo: Hideto Maccawa

平成生まれの話題の劇作・演出家、芸劇eyesに登場!

この1、2年、東京の小劇場を目ざとくチェックする人の間で、噂の中心になっていた贅沢貧乏。主な理由は、一軒家やアパートの一室に観客を招き入れ、建物が醸す生活感、周辺の地域性などのリアリティを取り込みながら、演劇作品としての強度を上げる取り組みをしてきた「家プロジェクト」。そのスキルをステップアップさせて、いよいよシアターイーストという劇場空間に挑む。作・演出・主宰の山田由梨は平成生まれ。新世代の芸劇eyesの口火を切る公演になることだろう。

文:徳永京子

作・演出:山田由梨 出演:田島ゆみか/大竹このみ/神崎れな/猪俣三四郎/

和田瑠子/野口卓磨/森準人/猪瀬清史/山田由梨